

日本の古地名のなかには漢字の読み方が現代の漢字音と違うものがある。

相模（さがみ）、望多（まぐた）、當麻（たぎま）、相楽（さがら）、大楊（おおやぎ）、伊香（いかご）、香山（かぐやま）、早良（さはら）、揖宿<指宿>（いぶすき）、揖保（いひほ）、邑樂（おはらき）、邑久（おほく）、雑賀（さひが）、甲斐（かひ）、駿河（するが）、敦賀（つるが）、讚岐（さぬき）、播磨（はりま）、平群（へぐり）、敏馬（みぬめ）、
 国学の祖と言われる本居宣長には『地名字音転用例』という著作があって、これは「和銅六年の詔に畿内七道諸国郷の名は好き字をつけよ」とあり、また延喜式の民部式に「凡そ諸国部内の郡里等の名は二字を並び用い、必ず嘉名を取れ」とあるのによって、二字にしたので、無理が生じたのであり、その昔は音仮名でも、訓でももっと自由に漢字をあてていた、と説いている。

これらの漢字の古代中国語音を調べてみると次のようになる。

相[sak*/siang]、望[mak*/muang]、當[tak*/tang]、楊[jak*/jiang]、香[xak*/xiang]、
 揖[jiəp]、邑[iəp]、雑[dzəp]、甲[keap]、駿[tziuən]、敦[tuən]、讚[tzan]、播[piuan]、
 群[giuən]、敏[mien]、（*は上古音をあらわす）

「カ行」音で終わっている漢字の古代中国語音の韻尾は[-ng]であることがわかる。日本漢字音では相（ソウ）、望（ボウ）、當（トウ）などである。中国語音韻学の最近の研究によれば唐代の中国語の韻尾[-ng]の上古音（隋以前の音）は[-k*]に近かったことがわかる。

香山は「香山」とかいて上古音では香山（かぐやま）と読めたはずであるが、「香」が香り（コウ）に変化して、万葉集の時代には香山（コウ・やま）としか読めなくなってしまうので、「具」を補って香具山（かぐやま）と読めるようにした。「甲斐」の「斐」、「揖保」の「保」なども発音の変化を補うものである。これを末音添記という。新羅の万葉集と言われる「郷歌」でも、しばしばみられる書記法で、たとえば、「風未」と書いてあれば、「風」は音で風（フ phung）と読むのではなく、朝鮮語の訓で風（바람 pa ram）と読めるように「未」を添加する。その手法が日本の古地名にも用いられているのである。

甲斐はもと山峽（やまかい）の峽[kyap]であったに違いない。それを和銅年間に、その字の字義を嫌って好字の甲[keap]に変え、「斐」を添付して二字にしたものであろう。

また「ハ行」で終わっている漢字の古代中国語音の韻尾は[-p]であることがわかる。つまり、日本の古地名に使われている漢字は唐代の漢字音ではなく、中国語の上古音に依拠しているのである。

香山は香久山あるいは香具山と書くこともある。日本が本格的な文字時代に入る7世紀後半には「香」は香（コウ）と発音されていて、香（がぐ）とは読めなくなってしまうたからである。

同様に揖保の「揖」も揖（ユウ）となっていて、一字では揖（いぶ）と読みなくなっ

まったので「揖」に「保」をつけて揖保としたものである。揖宿は揖宿（いぶすき）と読めなくなってしまったので指宿に変えてしまった。「蝶」は旧かな遣いでは蝶（てふ）であるが、「てふ」の「ふ」は中国語の蝶[thyap]の韻尾を表そうとしたものである。

また、信濃（しなの）のように信（シン）を信（しな）と読むこともあるが、駿河（するが）のように駿（シュン）を駿（する）のようにラ行で読むこともある。

「やまとことば」のなかの中国語からの借用語

私たちは国語の時間に漢字には二通りの読み方がある、音と訓に分けられる。音には漢音と呉音がある。訓は漢字に同じ意味をもつ「やまとことば」をあてたものであると習う。

しかし、菊（キク・きく）、竹（チク・たけ）、鉢（ハツ・はち）、舌（ゼツ・した）、筆（ヒツ・ふで）、葛（カツ・かづら）のように音と訓が酷似しているものがいくつか認められる。

死（シ・しす・しぬ）、州・洲（シュウ・す）、巢（ソウ・す）、稗（ヒ・ひえ）、迷（メイ・まよう）、剥（ハク・はぐ）なども偶然の一致にしては似ていすぎる。音訓ともに中国語からの借用語ではあるまいか。

韻尾の転移

【[-n][-m]】：日本語は開音節（母音で終わる音節）なので、中国語の[-n]には訓では母音を添加する。

殿[dyən]（との・デン）、絹[kyuan]（きぬ・ケン）、籾[shean]（しね・いね・セン）、ところが、中国語の韻尾[-n]が日本語ではマ行であらわれることがある。

君[giuən]（きみ・クン）、浜[pien]（はま・ヒン）、文[miuən]（ふみ・ブン）、肝[kan]（きも・カン）、臣[dien*/zjien]（とみ・シン）、

中国語の韻尾[-n]と[-m]はいずれも鼻音であり、音価が近く、日本漢字音では弁別されていない。現代の広東語では[-n]と[-m]は区別されているが、北京語では[-n]に統合されてしまっている。また、朝鮮漢字音では[-n]と[-m]は区別されているが、日本漢字音はすべて「ン」に統合されてしまっている。

また、中国語の韻尾[-m]は日本語ではナ行であらわれることもある。日本語では中国語の韻尾[-n]と[-m]は弁別されていない。また、訓でも[-n]と[-m]は交替することがある。

金[kiam]（かね・キン）、兼[hyam]（かねる・ケン）、稔[njiəm]（みのる・ネン）、

中国語の韻尾[-n][-m]は訓では「ラ行」であらわれることがある。「ナ行」と「ラ行」は調音の位置が同じ（歯茎の裏）であり、転移しやすい。

雁[ngean]（かり・ガン）、塵[dien]（ちり・ジン）、漢[xan]（から・カン）、巾[kian]（きれ・キン）、昏[xuan]（くれ<暮>・コン）、薫[xiuən]（かおり・クン）、

中国語の韻尾[-n]の上古音は[-t*]に近く、同じ声符の漢字の韻尾を産[san]・薩[sat]、本[puən]・鉢[puat]、因[ien]・咽[iet]のように読み分けることがある。[-t*]が古く、[-n]のほうが新しい。中国語の韻尾[-n]は日本語の訓では「タ行」であらわれることがある。

本[puət*/pyən] (もと・ホン)、幡[buat*/buan] (はた・バン)、管[kuat*/kuan] (くだ・カン)、肩[kyat*/kyan] (かた・ケン)、腕[uat*/uan] (うで・ワン)、堅[kyet*/kyen] (かたい・ケン)、断[duat*/duan] (たつ・ダン)、満[muat*/muan] (みつる・マン)、

【[-ng]】：中国語の韻尾[-ng]の上古中国語音は[-k*]に近く、同じ声符をもった漢字の韻尾を等[təng]・特[dək]、容[jiong]・欲[jiok]、消[siô]・削[siôk]、のように[-ng]と[-k]に読み分けることがある。[-k*]が古く、[-ng]は後の音である。日本語の訓では「カ行」であらわれることが多い。

莖[heak*/heang] (くき・ケイ)、塚[tiok*/tiong] (つか・チョウ)、床[diak*/dzhiang] (とこ・ショウ)、丈[diak*/diang] (たけ・ジョウ)、景[kak*/kyang] (かげ・ケイ)、楊[jak*/jiang] (やなぎ・ヨウ)、双[sheak*/sheang] 六 (すごろく・ソウ)、

大和には當麻寺(タイマ・でら)という寺があるが、古事記歌謡に「大坂に遇ふや少女を道問へば直には告らず當藝麻知(ガギマチ)を告る」(記履中)という歌がある。當[tang]を古くは當(タギ)と読んだのである。

【韻尾脱落】：中国語の韻尾[-p] [-t] [-k]は現代の北京語では失われている。日本語は開音節なので、古代日本語では失われることがある。

目[miuk] (め・モク)、田[dyen] (た・デン)、酸[suan] (す・サン)、帆[hiuən] (ほ・ハン)、辺[pyen] (へ・ヘン)、方[piuang] (へ・ホウ)、黄[huang] (き・コウ)、名[mieng] (な・メイ)、

【韻尾の痕跡】 中国語の韻尾[-p] [-t] [-k]は広東語では保たれている。広東語は古代中国語音に近いと考えられている。日本語の訓にも古代中国語の韻尾が保たれているものがある。「墓」は莫(バク)と声符が同じであり、「時」は特(トク)と声符が同じである。古代日本語では濁音が語頭にこないのが清音になる。

墓[mak*] (はか・ボ)、時[dək*/zjiə] (とき<特[dək]>・ジ)、地[diet*/diei] (つち・ち)、酒[dzuk*/tziu] (さけ・シュ)、蝶[thyap] (てふ・チョウ)、頬[kyap] (ほほ・ほお・キョウ)、渋[shiap] (しぶい・ジュウ)、甲[keap] (かぶと<甲兜>・コウ)、

【韻尾の転移】：古代日本語には「ラ行」ではじまることばがなかったことはよく知られている。日本語の「ラ行」ではじまることばはほとんどが借用語である。例；螺鈿、瑠璃、輪廻など

しかし、古代日本語では中国語の韻尾[-t]が日本語では「ラ行」であらわれることが多い。[-t]→[ら行]：払[piuət] (はらう・フツ)、祓[piuət] (お-はらい・フツ)、擦[tsheat] (する・サツ)、出[thjiuət] (でる・シュツ)、

朝鮮語では中国語の韻尾[-t]は規則的に(-l)に転移する。[-t]と(-l)は調音の位置が同じ(歯茎の裏であり、転移しやすい。例：払(扌・pul・はらう)、祓(扌・pul・お-はらい)、擦(扌・chul・する)、出(出・chul・でる)、

また、朝鮮語では「足」のことを訓で足(다리・ta ri)という。これは中国語の足[tziok/tiok*]の韻尾の[-k]がラ行に転移したものであろう。日本語でも「藤原鎌足」「足りる」などとい

う。中国語の韻尾[-k][-p][-ng]も日本語では「ラ行」であらわれることがある。

[-k]→[ら行]: 足[tiok*/tziok] (たり・ソク)、夜[yak*/jya] (よる・ヤ)、黒[xək] (くろ・コク)、腹[piuk] (はら・フク)、殻[khək] (から・コク)、識[sjiek] (しる・シキ)、
[-p]→[ら行]: 汁[tjiəp] (しる・ジュウ)、摺[tjiəp] (する・シュウ)、執[tiəp] (とる・シツ)、
[-ng]→[ら行]: 香[xiang] (かおり・コウ)、軽[khieng] (かるい・ケイ)、狂[giuang] (くるう・キョウ)、通[dong] (とおる・ツウ)、平[being] (ひら・ヘイ)、

日本には「やまとことば」は神代からこの日本列島に伝わる純粹で混じりけのないことばである、という考え方が古くからある。国学の祖といわれる本居宣長は『漢字三音考』のなかで、次のように述べている。

皇^{スメラオホ}大御國^{ミクニ}ハ天地ノ間ニアラユル萬國ヲ御照^{ミテラ}シ坐^{マシ}マス天^{アマテラス}照^{オホミカミ}大御神ノ御生坐^{ミアレマセ}ル御國^{ミクニ}ニシ

テ、、、(中略)殊^{メデ}ニ人ノ聲音言語ノ正シク美キコト。亦^{ハルカ}復^{マサリ}ニ萬國ニ優テ。其音晴朗ト

キヨクアザヤカニテ。譬^ヒヘバイトヨク晴タル天ヲ日中ニ仰^ミギ瞻ルガ如ク。イササカモ曇

リナク。又單直ニシテ迂^マ曲^ガレルコト無クシテ。真ニ天地ノ間ノ純粹正雅の音也。

これに対して外国人の音は、すべて朦朧として濁っている、というのである。「漢字三音」とは呉音、漢音、唐音のことであり、江戸時代にはまだ漢字の上古音は知られていない。しかし、日本は記紀万葉ができる八世紀より千年も前から大陸から稲作や鉄の文化を含む文明を受け入れて、弥生文化を花咲かせている。それによってことばや文字も伝えられたはずである。

最近中国でも、中国最初の詩集である『詩経』(紀元前 600 年頃成立)の韻の研究などから上古中国語の復元が進められている。それによってもって「やまとことば」のなかにも中国語からの借用語が多くあることが明らかになってきた。

頭音の転移

漢字は音節文字で漢字の一字は中国語の一音節に対応している。中国語の音節は次のようにできている。

頭子音+介音(わたり音・[-i-][-u-][-iu-]) + 主母音+韻尾([-p][-t][-k][-n][-m][-ng])

漢字音は隋の時代に頭子音と主母音の間の「わたり音」が発達してきたと考えられており、その影響で、頭子音が口蓋化して規則的に変化した。

【た行⇒サ行】:

同じ声符をもった漢字の読み方が[-i-]介音の発達によって変化した。

途[diə]・除[diə]、都[ta]・者[tjya]、澤[deək]・釋[sjyak]、直[diək]・植[zjiək]、珍[tjən]・

診[tshien]、鎮[tien]・真[tjien]、鈍[duən]・鈍[zjiuən]、團[duan]・專[tshiuən]、

日本語でも中国語の音韻変化の影響を受けて、訓では「た行」であったものが、摩擦音化して、音では「サ行」に転移した。訓は隋以前の中国語音を規範としたものであり、音は唐代の中国語音をはんえいしている。

時[diək*/zjiə] (とき・ジ)、寺[diək*/ziə] (てら・ジ)、樽[duən*/dzuən] (たる・ソン)、
照[tiök*/tjiô] (てる・ショウ)、衝[thiök*/thjiong] (つく・ショウ)、床[diak*/dzhiang]
(とこ・ショウ)、丈[diak*/diang] (たけ・ジョウ)、常[diang*/zjiang] (つね・ジョウ)、
辰[tiət*/zjiən] (たつ・シン)、楯[diuət*/djiuən] (たて・ジュン)、

【か行⇒サ行】

漢字のなかには同じ声符をカ行とサ行に読み分けるものがある。これも中国における音韻変化をはんえいしたものである。

技[gie]・枝[tjie]、公[kong]・松[ziong]、坤[khuən]・神[djien]、訓[xiuən]・川[thyuən]、
感[həm]・鍼[tjiəm]、勘[khəm]・甚[zjiəm]、監[keam]・臣[sjien]、嗅[thjiuk]・臭[thjiu]、

日本語でも、訓で「か行」であらわれる漢字が音では「サ行」であらわれることがある。稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘には「獲加多支鹵」とあり、「支」はカ行で「ワカタケル」は雄略天皇を指すと考えられている。5世紀後半の日本語では「支」はカ行で読んでいたのである、

神[khiən*/sjien] (かみ・シン)、辛[xien*/sien] (からい・シン)、之[xiə*/tjiə] (これ・シ)、
是[hie*/zjie] (これ・ゼ)、此[xie*/tsie] (これ・シ)、子[xiə*/tziə] (こ・シ)、小[xiao*/siô]
(こ・ショウ)、消[xiô*/siô] (けす・ショウ)、川[xiuən*/thyuən] (かわ・セン)、(*は上古中国語音を表す。)

「神」と同じ声符をもった漢字に乾坤一擲などのときに使う坤[khuən]があり、「神」と「坤」はある時期、ある地方で同じ発音であったと想定することができる。「神」に神[khuən]という中国語の古音があったとすれば、日本語の神(かみ)は中国語の「神」と同源であろう。

【は行・サ行】

古代の日本史に登場する秦氏は中国語の秦の末裔が朝鮮半島を経て渡ってきた一族でという。中国語の「秦」の上古音は秦[hyen*]であり、それが[-i-]介音の発達によって口蓋化して唐代には秦[dzyen]になったものと考えられる。韻尾の[-n]の上古音は[-t*]に近かったから日本語では秦(はた)となった。

同じ声符をもった漢字をカ行とハ行に読み分ける漢字もある。例えば感[həm] (カン)・箴[hiam*/tjiəm] (はり・シン) は上古音の箴[hiam*]の韻尾がラ行に転移して箴(はり)となったものであり、それが口蓋化して箴[tjiəm]となったものである。現代の北京語では「感」は感(gan)であり、箴は箴(zhen)である。

秦(はた)のついた地名は秦野、榛名全国各地にみられる。京都の太秦(うずまさ)も秦氏の根拠地のひとつである。

現代の日本語でも信州の方言や、東京下町の方言では火を火(シ)と混同されることがあるが、古代の日本語でも品[phiəm]を品(しな・ヒン)として、JRの品川駅は「シナガワ」である。

【ハ行音の転移】

日本語の「ハ行」はファ・フィ・フ・フェ・フォだったという説があつて国語学会では概ね支持されているようである。ある先生は万葉集の時代もファ・フィ・フ・フェ・フォだったとして、「春過ぎて 夏来るらし 白妙の 衣ほしたり 天の香具山」を「ファル過ぎて 夏来るらし 白タフェの 衣フォしたり 天の香具山」などと読んでみせたりしている。

しかし、現代の日本語ではハ行は唇を閉じて、それを息を吐いて破裂させる音ではなく、むしろ口を開いて喉の奥で調音する音に近い。英語などの pen、pin などの p は破裂音で、両唇を閉じて、息を吐く勢いで唇を開く破裂音である。

訓(古代日本語)で「は行」であられる音は音(奈良時代の漢字音)では「カ行」であられるものが多い。古代中国語の喉音[x-][h-]は日本語の訓では「は行」であられ、音ではカ行であられる。

[h-]の例：灰[huai] (はい・カイ)、華[hoa] (はな・カ)、脛[hyek*/hyeng] (はぎ・はぎ)、閑[hean] (ひま・カン)、宏[hoəng] (ひろい・コウ)、

[x-]の例：火[xuai] (ひ・カ)、花[xoa] (はな・カ)、吼[xong] (ほえる・コウ)、惚[xuət] (ほれる・コツ)、響[xiang] (ひびく・キョウ)、

また、中国語の[k-][kh-][g-][ng-]も訓では「は行」であられ、音では「カ行」であられることがある。古代日本語では中国語の喉音[x-][h-]と後口蓋音である[k-]系の音が弁別されていない。

[k-][kh-]の例：類[kyap] (ほほ・ほお・キョウ)、果[kuat*/kuai] (はて・カ)、古[kak*/ka] (ふるい・コ)、広[kuang] (ひろい・コウ)、経[kyeng] (ふる・ケイ)、減[kəm] (へる・ゲン)、筐[khiuang] (はこ・キョウ)、寛[khuan] (ひろい・カン)、

[g-][ng-]の例：櫃[giut*/giui] (ひつ・キ)、鱈[git*/gii] (ひれ・キ)、堀[giuət] (ほり・クツ)、掘[giuət] (ほる・クツ)、原[ngiuan] (はら・ゲン)、牙[ngea] (は・ガ)、

日本語の「ハス」「ハギ」には「蓮」「萩」の漢字が当てられているが、中国語の「荷[hai]子」、「芽[ngea]子」と同源であろう。

日本語の「ハ行」がファ・フィ・フ・フェ・フォに近いとされた理由のひとつが、日葡辞書に h でなく f で表記されているからである。ポルトガル人やスペイン人が日本にやってきたのは15世紀のことである。その発音を8世紀の万葉集の発音にあてはめるのはいかなものだろうか。

どうもスペイン語やポルトガル語は h を発音しない傾向があるようである。スペイン語では「男」は hombre と書いて「オンブレ」、「歴史」は historia と書いて「イストリア」と読む。「オランダ」は Holanda と書き、「オランダ」と読む、

日葡辞書に h がつかわれていない理由は、ポルトガル語では h は表記されても発音され

ないからではなかろうか。

【喉音[h-][x-]の脱落】

中国語の喉音[h-][x-]は日本語にはない音であるため、[-i-]介音の前では脱落することが多い。また、[k-][g-][ng-]系の音も調音の位置が[h-][x-]系の音に近いので、脱落することがある。

- 頭音の脱落：恵[hyuei] (ケイ・エ)、回[huəi] (カイ・エ)、壊[hoəi] (カイ・エ)、絵[huai] (カイ・エ)、黄[huang] (コウ・オウ)、景[kyang] (ケイ)・影[kyang*/yang] (エイ)、
- 頭音の痕跡：雲[hiuən] (くも・ウン)、熊[hiuəm] (くま・ユウ)、越[hiuat] (こえる・エツ)、煙[hyen*/yen] (けむり・エン)、鴉[ngea*/ea] (からす<鴉佳>・ア)、鴨[kap*/ap] (かも・オウ)、

中国語には日本語にはない音がある。日本語にない音の場合は、日本語に近い音に転移することが多い。転移には一定の法則があつて、調音の位置が同じ音は転移しやすい。また、調音の方法が同じ音は転移しやすい。

【疑母[ng-]の転移】

疑母[ng-]は日本語では語頭に來ることのない音である。調音の位置は後口蓋で[k-][g-]と同じであり、日本語ではカ行に転移する。また、調音の方法は鼻音で[n-][m-]と同じであり、ナ行、マ行に転移することがある。

- [カ行]：雁[ngean] (かり・ガン)、牙[ngea] (きば・ガ)、言[ngian] (こと・ゲン)、刈[ngiat*/ngiai] (かる・ガイ)、顔[ngean]貌[mau] (かほ・かお・ガン)、
- [マ行に転移]：疑母[ng-]は日本語では語頭にあらわれない音であり、訓では調音の方法が同じ(鼻音)「ま行」にあらわれ、音では「カ行」にあらわれる。
芽[ngea] (め・ガ)、眼[ngean] (め・ガン)、元[ngiuan] (もと・ゲン)、御[ngia] (み・ゴ・ギョ)、雅[ngea] (みやび<雅美>・ガ)、迎[ngyang] (むかえる・ゲイ)、
- [ナ行に転移]：額[ngeak] (ぬか・ガク)、願[ngiuan] (ねがう・ガン)、睨[ngye] (にらむ・ゲイ)、
- [頭音脱落]：魚[ngia] (うお・ギョ)、御[ngia] (お・ギョ)、我[ngai]・吾[nga] (あ<古語>・ガ)、岳[ngək] (おか・ガク)、顎[ngak] (あご・ガク)、牛[ngiuə] (うし<牛(う)>+朝鮮語の全(so)>・ギユウ)、

【日母[nj-]の転移】

日母[nj-]は[m-]あるいは[n-]が口蓋化したもので、唐代以降にはさらに[dj-]に変化した。日本漢字音では「ニ」または「ジ」であらわれる。「ニ」が古く、「ジ」のほうが新しい。訓では口蓋化以前の形である「マ行」音であらわれることもある。

- [マ行]の痕跡：女[mia*/njia] (め・ジョ)、耳[miəm*/njia] (みみ・ジ)、穰[miang*/njiang] (みのる・ジョウ)、任[miəm*/njiam]那(みまな)、壬[miəm*/njiam]生(みぶ)、
- [ナ行]：肉[njiuk] (にく)、汝[njia] (なんじ・な<古語>・ジ)、濡[njio] (ぬれる・ジュ)、

- [頭音脱落]：柔[njiu] (やわら・ジュウ)、弱[njiôk] (よわい・ジャク)、若[njiak] (わかい・ジャク)、熱[njiat] (あつい・ネツ)、閏[njiuən] (うるう・ジュン)、潤[njiuən] (うるおう・ジュン)、讓[njiang] (ゆずる・ジョウ)、入[njiap] (いる・ニュウ)、

【来母[l-]の転移】

来母[l-]は日本語では語頭くることのない音である。調音の位置が歯茎の裏で[t-][d-][n-]と同じなので、日本語では「タ行」「ナ行」に転移することがある。

- [タ行に転移]：瀧[leong] (たき・リュウ)、卵[luan] (たまご<卵子>・ラン)、粒[liəp] (つぶ<いぼ>・リュウ)、立[liəp] (たつ・リツ)、連[lian] (つらなる・レン)、
- [ナ行に転移]：浪[lang] (なみ・ロウ)、梨[liet] (なし<梨子>・リ)、練[lian] (ねる・レン)、
- [カ行に転移] (上古音の痕跡)：來[(h)lə*/lə] (くる・ライ)、栗[(h)liet*/liet] (くり・リツ)、鎌[(h)liam*/liam] (かま・レン)、獵[(h)liap*/liap] (かり・リョウ)、輪[(h)liuən*/liuən] (くるま・リン)、籠[(h)long*/long] (かご・ロウ)、辣[(h)lat*/lat] (からい・ラツ)、漢字のなかには同じ声符をラ行とカ行に読み分けるものがある。洛(ラク)・格(カク)、簾(レン)・兼(ケン)、覧(ラン)・監(カン)などである。スウェーデンの言語学者ベルンハルト・カールグレン(1889-1978)は、これは上古中国語に各[hlak*]のような複合子音があり、それが一方では洛[lak]となり、他方では格[kak]となったに違いないと考えた。
- [マ行に転移]：同じ声符をもった漢字を來[lə]・麥[muək]のようにラ行とマ行に読み分けることがある。日本語でも訓ではマ行であらわれ、音ではラ行であらわれる例がみられる。例：嶺[lieng] (みね・レイ)、漏[lo] (もる・ロウ)、覧[lam] (みる・ラン)、
- [頭音脱落]：古代日本語にはラ行ではじまることばはなかったから、中国語の l に介音(わたり音) [-i-]が続く場合は、頭音の l は脱落する。例：陸[liuk] (おか・リク)、良[liang] (よき・よい・リョウ)、梁[liang] (やな・リョウ)、柳[liu] (やなぎ<柳木>・リュウ)、療[liô] (いやす・リョウ)、日本語の「やなぎ」の古代中国語音は楊[jiang]、柳[liu]である。朝鮮漢字音では楊(양 yang)、柳(유 yu)であり、音価が近い。
- [母音添加]：古代日本語にはラ行ではじまることばなかったから、中国語の l の前に母音を添加する例がみられる。例：裏[liə] (うら・リ)、麗[lyai] (うるわし・レイ)、炉[la] (いろり・ロ)、

【明母[m-]の転移】

明母[m-]は[p-][b-]と同じく唇で調音される音であり、[n-][ng-]などと同じように鼻音である。古代日本語ではナ行に転移したものが多くみられる。また、マ行音は半濁音であるため、語頭では発音しにくかったようで、馬(う-ま)、梅(う-め)のように、語頭に母音を添加することもあった。

- [マ行の例]：麦[muək] (むぎ・バク)、目[miuk] (め・モク)、眉[miei] (まゆ・ビ)、牧[miuək] (まき・ボク)、迷[myei] (まよう・メイ)、免[mian] (まぬがる・メン)、萌[meang]

- (もえる・ボウ)、満[*muat*/muan*] (みちる・マン)、
- [ハ行に転移]: 滅[*miat*] (ほろびる<滅亡>・メツ)、墓[*mak*/ma*] (はか・ボ)、
 - [ナ行に転移]: 名[*mieng*] (な・メイ)、無[*miua*] (ない・ム)、苗[*miô*] (なえ・ビョウ)、
猫[*miô*] (ねこ・ビョウ)、鳴[*mieng*] (なく・メイ)、寐[*muət*/muəi*] (ねる・ビ)、眠[*mien*]
(ねむる・ミン)、
 - [ワ行に転移]: mは唇音であり、wは唇を丸めて調音する合音であり、転移しやすい。
例: 尾[*miuəi*] (を・お・ビ)、綿[*mian*] (わた・メン)、畏[*mien*] (わな・ミン)、
 - [母音添加]: 馬[*mea*] (う・ま・バ)、梅[*muə*] (う・め・バイ)、没[*muət*] (う・もる・ボツ)、
味[*miuəi*] (う・まい・ミ)、妹[*muəi*] (い・も・マイ)、夢[*miuəng*] (い・め・ゆ・め・ム)、
万葉集では「馬」は「宇麻」「宇万」のほか「牟麻」の表記もみられる。また、「梅」は「宇
米」「于米」のほか「宇梅」「烏梅」のような表記もみられる。
 - [カ行に転移]: 同じ声符をもった漢字に、マ行とカ行に読み分ける漢字がある。毎(まい)・
海(カイ)。綿(メン)・錦(キン)、黙(モク)・黒(コク)、物(モツ)・惚(コツ)など
である。スウェーデンの言語学者ベルンハルト・カールグレン(1889-1978)は、これは上
古中国語の語頭音に[(h)m*]のような複合子音があり、それが後に(h)が発達して海(カイ)
になり、(h)が脱落したものが毎(マイ)になったと考えた。この説は現代ではかなり幅
広く受け入れられている。

日本語のなかにも訓が「か行」で、音が「マ行」であらわれるものがみられる。

例: 米[(h)mei*/mei] (こめ・マイ・ベイ)、門[(h)muət*/muən] (かど・モン)、
毛[(h)mô*/mô] (け・モウ)、媚[(h)miuet*/miuei] (こびる・ビ)、

また、訓が「ま行」で、音が「カ行」であらわれるものがある。海(うみ・カイ)の声
符は毎[*muə*]であり、訓の海(うみ)は「毎」に母音が添加されたものである。

例: 海[(h)muə*/muə] (うみ・カイ)、恵[(h)myuei*/(h)yuei] (めぐみ・ケイ・エ)、
丸[(h)muan*/huan] (まる・ガン)、宮[(h)miuəm*/kiuəm] (みや・キュウ)、
見[(h)myan*/hyan] (みる・ケン)、観[(h)muan*/kuan] (みる・カン)、
曲[(h)miok*/khiok] (まげる・キョク)、回[(h)muəi*/huəi] (まわる・カイ)、

宮田一郎編著『上海語常用同音字典』(光生館)によれば、現代の上海語ではmの前に
声門閉鎖音あるいは[h]のような音が聞こえるという。例: 馬(?ma)、米(hmi)、など、

古代日本語の再現は困難な作業であり、分からないことばかりである。まだまだ、隠され
た複雑な音韻変化の規則がありそうである。「やまとことば」のなかの中国語語彙の借用の
歴史だけとってみても、弥生時代の初めから記紀万葉の時代までの約千年の歴史が横たわ
っている。

日本語の語源

「やまとことば」には外来語は含まれていないというが、本居宣長以来の国学の考え方で
ある。明治になって最初に編纂された近代的国語辞書である大槻文彦の『言海』には次のよ

うな例が示されている。

- いね[稲]：飯根（イヒネ）ノ約カ。
- うし[牛]：大獣（オシシ）ノ轉カ。
- うみ[海]：大水（オホミ）ノ約轉カ。
- うめ[梅]：熟實（ウミミ）ノ約轉ナリト云フ。
- こめ[米]：小實（コミ）ノ轉カト云。
- ふで[筆]：書手（フミテ）ノ略。
- ふみ[文]：經見（フミ）ノ義カト云。
- むぎ[麥]：群芒（ムレノギ）ノ略ト云。

尚古の学である国学の世界では、これらの説が今も受け継がれている。これらの日本語が弥生時代以来約千年の間に中国語から受け入れられた借用語であるとすれば、日本語史の見方は根本的に変わってしまう。しかし、それは国学の世界にとっては不都合な事実であるらしい。

日本の学問は師資相承だから、国学は国学の祖である本居宣長の思想はうけついでいるが、漢学や一般言語学との間に交流がない。最新の中国語音韻学の知見を取り入れれば、これらのことばは古代中国語と同源であることがわかる。

- いね[稲]：籼[shen]と同源である。籼（しね）とも云い「うるち」の意味である。
- うし[牛]：牛[ngiuə]の頭音が脱落したものである。朝鮮語では「牛」の音は우(u)、訓は소(so)であり、音と訓を併記したものである。朝鮮語では「天」のことを하늘천(ha neul cheon)のように訓の하늘(ha neul)と音の 천(cheon)を併記する書記法が古くからあった。いわば、中国語と朝鮮語の逐語翻訳である。
- うみ[海]：中国語の海[xuə]の上古音には海[(h)muə*]のような入りわたり音(h-)があり、入りわたり音が発達したものが海（カイ）になり、声符の「每」は毎[muə]になった。日本語の海（うみ）は毎[muə]の前に母音「ウ」が添加されたものであり、海（カイ）は入りわたり音(h-)がはったつしたものである。
- うめ[梅]：日本語の梅（うめ）は中国語の梅[muə]の前に母音「ウ」が添加されたものである。。
- こめ[米]：中国語の米[miei]の上古音には米[(h)miei*]のような入りわたり音(h-)があり、日本語の米（こめ）は中国語の上古音の痕跡を留めたものである。
- ふで[筆]：中国語の筆[piet]は訓では筆（ふで）となり、音では筆（ヒツ）となった。古代日本語では語頭では清音になる音が第二音節以下では濁音になることが多かった・
- ふみ[文]：中国語の文[miauən]は訓では文（ふみ）となり、音では文（ブン）となった。古代日本語では語頭に濁音がくることはなかったので訓では「文」は清音の文（ふみ）となった。また、古代日本語には「ン」で終わる音節はなかったので、韻尾に母音をつけて文(fu mi)とした。
- むぎ[麥]：中国語の麥[muək]は訓では麥（むぎ）となり、音では麥（バク）になった。

日本語の起源

人は誰でも「日本人はどこから来たか」「日本語はどこから来たか」知りたいと思う。戦前の歴史観では、日本人も日本語も神代の時代に遡ると考えていて、それを疑わなかったから、その答えは簡単であった。

しかし、戦後になって「やまとの国」建国神話が崩壊すると、日本人は海のかなたに日本語の祖先を求めようになった。1955年には医師の安田徳太郎が『万葉集の謎』（カッパブックス）を出版して、日本語の祖先はレプチャ語であるという説をたてて、ベストセラーになった。

「わたしはヒマラヤの谷底で、万葉集の時代の日本語を、現にしゃべっている民族につきあつた。それだけではない。かれらはわたしたちと同じに、た。アカンとかソワソワとか、シドロモドロという言葉をししゃべっていた。」という書き出しである。レプチャ語というのはネパールとブータンの中間にあるキッシムで話されていることばである。安井徳太郎によれば、日本語の故郷はヒマラヤの山麓であるという、ロマンチックな話である。

1957年になると国語学の専門家である大野晋が『日本語の起源（旧版）』を出して、日本語はアルタイ系の言語であるという、当時の学界の定説にもとづいて、日本語の起源を説いた。1950年代といえ、まだ日本人が自由に海外旅行をできる時代ではなかったの、学者でもヒマラヤやアルタイ山脈へ出かけて行って、検証できる時代ではなかった。しかし、日本人の想像力をかきたてるには十分であった。

その後も、日本語の起源、南の島説、北方説などが入り乱れた。そんな中で大野晋は日本語アルタイ系説を捨てて、タミール語との同系説に変節した。なかにはカトリック系の著者で、日本語はラテン語と同系であるという説まで出た。

ことばは一つの体系である。その体系を解明することなしに、外国語のなかに日本語と類似した語彙を探し求めるだけでは、日本語とは何であるかを明らかにすることはできない。

川の源流を訪ねるのに、いきなり源流から下ってくるができないように、日本語の源流からはじまって現代の日本語にいたることはできない。まずは記紀万葉の日本語を研究して、それから遡って古墳時代の日本語、弥生時代の日本語へと、はじめてたどり着くことができる。「やまとことば」の中の中国語からの借用語は呉音、漢音ばかりでなく、訓（やまとことば）の中にも含まれている。これを「弥生音」（日本が本格的な文字時代に入る8世紀より以前、弥生時代から古墳時代にかけて受け入れて借用語の読み方）と呼んでもいいのではなからうか。

仏教徒ともに大量の抽象概念語が入っていた6世紀は日本ではまだ古墳時代である。古墳時代の日本語には、中国文明がもたらしたすべての語彙に対応する「やまとことば」があったとは考えられない。今までは、訓（やまとことば）は古来の日本語で、音は中国語からの借用語だというのが、一般的な考え方だった。しかし、7世紀には中国の政治体制にならって、律令制が確立されている。8世紀に成立した『古事記』や『万葉集』が「やまとこと

ば」だけで書かれていて、中国語からの借用語はなかったということは信じがたいのである。これもひとつの「やまとことば」神話といわざるをえない。「やまとことば」とのなかにも、中国語などからの借用語がかなり含まれていたことが、上古中国語音の研究によって明らかになってきている。

古代日本語の再現には古代中国語の音韻体系を知ることが必要になる。本稿では以下の文献を参考にした。

王力『同源字典』商務印書館、北京、1997年、

董同龢『上古音韻表稿』中央研究院歴史言語研究所出版、台北、中華民國86年、

白川静『字通』平凡社、

藤堂明保編『学研 漢和大辞典』学習研究社、

Bernhard Karlgren "Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese" Paris, 1923

次回は最終回「日本語の座標軸」